

仙台市泉区 30代 女性 主婦



自分より他人を優先する素晴らしい友人

自宅で夕食の買い物に出かけようかなと考えていたところ、地震が発生。

幸いにも家族はみんな無事に帰宅できたので、まずは安心できました。電気・水道は数日で復旧し、お米を始め、数日間は何とかなる程度の食料はあったのでカセットコンロを使用し、料理をして何とか生活できていました。

そんなとき、飲食店オーナーの友人から連絡が入り、可能な限りでいいのでお米をもらえないかと。

当然、まだ営業できるわけでは無いと思っていたので、自宅分かと思い、「飲食店オーナーなのにお米のストック無かったの?」と聞いたら、近所で困ってる方のために炊き出しで、おにぎりを配布するので、できる限りお米を集めたいと。

こんな状況で自分たちのことより、周りの方のことを考える素晴らしさに感動。

今回の経験から、どんなときでも助け合いの精神、心に余裕を持つことができる人間になりたいと改めて感じることができました。

震災が起きてからではなく、普段からの心掛けが全てですね。



東京都豊島区 40代 男性 自営業



電話がつながらずに走って確認

避難所の場所が分からない

この周辺では、小学校が災害時の緊急避難場所になっています。帰宅困難となった人たちのなかには遠方に帰らなければならない人も多かったようで、高崎から来ている人もいました。そういった人たちから、どこか泊まる場所はないかと訊かれましたが、近所でどこの施設が開放されているかの情報がまったく入ってきません。

電話もつながらない状況だったので、調べるためには自分の足を使うしかありません。もしかしたらと思って、近くの小学校に走っていくと、帰宅困難者を受け入れていたのです。それが夜の8時から9時の間ぐらいのことです。それから、受け入れ先を探している人に、その小学校を案内するようにしました。後で分かったのですが、お寺さんにも避難された方々がいたようです。

宿泊施設の他に訊かれたのは、自宅に帰る方角、トイレや公衆電話の場所、電車の運行状況が多かったように思います。トイレはお寺さんやコンビニ、国道沿いの公衆トイレを案内して、運行状況はテレビやインターネットで調べた情報をできる限り提供しました。それと結構多かったのが、靴ずれしてしまった女の人です。そういった人には絆創膏をお配りして対応しました。



東京都豊島区 50代 男性 大学職員



携帯電話での緊急連絡システムを構築

公衆電話が使えない学生も

当大学には、2010年4月にスタートした携帯電話を利用した緊急連絡システムがあります。東京で震度5強以上の地震が発生すると、学生・教職員の携帯電話に安否確認のメールが自動送信されるというもので、学生の約8割が登録しています。

今回の震災では、被災地出身の学生のなかで安否の返事が来ない数百人に、手分けをして個別に連絡を取りました。結果、全員無事でした。立ち上げたばかりのシステムでしたが、非常時に備えることの大切さを実感しました。

携帯電話の有用性が確認できたのと同時に、今回の震災では携帯世代の弱点も見えました。携帯電話が通じづらくなっていたことで、校内にある数台の公衆電話の前には行列ができていたのですが、驚いたことに、学生を含めた若い避難者の人たちのなかには、公衆電話の使い方が分からない人がいたのです。都内にかけるのに最初に03が必要かどうか、受話器を取ってからプッシュホンを押すのか？若い世代には携帯電話しか使ったことがない人もいたのです。



松江市 60代 女性 公民館長



停電と断水も工夫で乗り切る

石油ストーブ、カセットコンロ、湯たんぽ、山の水が大活躍

12月31日の朝、近所の方から「お宅は電気きてる？」と聞かれました。周辺はどこも電気がきてなくて、電力会社へ電話することにしました。しかし、いっこうに繋がりません。みんなで何十回とかけ、やっと繋がりました。電力会社も、こんな事態は想定してなかったと思います。

その日から1月3日の夜7時ごろまで、4日間停電しました。うちはオール電化なので、電気がないと、お正月準備もできません。31日の夜は、深夜電力で温められたお湯が使えましたが、それ以降は使えませんでした。

納屋から石油ストーブを捜し出してきて、お湯を沸かして湯たんぽで暖をとったりしました。カセットコンロも使いました。お正月前で、たくさん買い物をしていたので助かりました。

断水もしていたので、トイレに流す水は山から水を汲んで使いました。ただ凍りついていたので、溜めるのが大変でした。コンビニで何でも買える時代ですが、今回の経験で、工夫することの大切さを実感しました。



松江市 60代 女性 公民館長



声かけや水配りで安否を確認

非常時に心強い、ご近所さんの存在

公民館長をしていますので、1月2日から公民館に来ていましたが、除雪依頼の電話や停電、断水の電話がジャンジャンかかってきました。雪が深くて行けないような場所でも、電話で状況がわかったり、安否確認ができればいいのですが、電話が不通な所や携帯電話を持っていない方とは連絡がとれず、なかなか全体を把握することができませんでした。

非常時には、隣近所の人同士で安否確認をすることが大切です。雪かきに出てきていないお宅には、声かけなどをしていました。また、断水している地域には背負子^{*}で水を運びましたが、水を配りながら安否確認をしました。孤立感が深まる中、自分たちのことを認識してくれていることが、大きな安堵感に繋がったのではないのでしょうか。

私の家の隣に透析を受けている人がいまして、うちの息子が雪のデコボコ道を車で病院まで送っていったということがありました。今回の雪害では、ご近所さんを心強く感じた人が多かったのではないのでしょうか。

※荷物を背中に背負って運搬するための竹などで編んだ籠のこと。



一日前プロジェクト みんなでやってみよう!

----- 簡単な手順を紹介します -----

まず、過去の自然災害(地震、水害)の中から対象を選ぶ

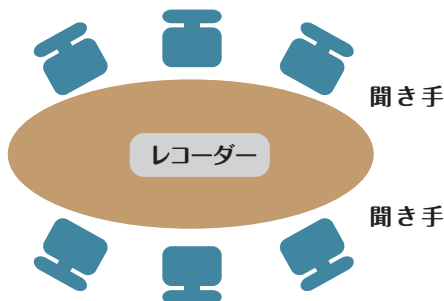
その災害の被災経験者や災害対応経験者に声をかける

みんなが集う場所と時間を設定する

※所要時間は2時間

なごやかな雰囲気の中で、当時を思い出しながら、体験したり感じたことを話し合ってもらおう

※話し手は、2~4人が適当



「教訓」や「知恵」につながる部分を拾い出し、タイトルをつける

テープ起しなどを基に、拾い出した部分を物語にする

※物語は、300~500字程度で、できるだけ切り口を残して編集

※物語の情景をあらわすイラストや写真等を添えると効果的

作成した「物語」を地域や職場のみんなに読んでもらう

気づき

共感

反省

「一日前プロジェクト」とは、地震や水害などの自然災害で被災した方や災害対応の経験をもつみなさまにお集りいただいて、

- 被災前後の行動
- 体験を通じて上手くいったと思うこと、失敗したと思うこと
- もう一度災害が発生したならば、次はどのように行動したいか
- そのために日頃から何を準備しておけばよかったか

といった本音の話をお聞かせいただき、これらの話から導き出されるさまざまな教訓や身につまされる体験をショートストーリー(エピソード)に取りまとめるという活動です。

こうして取りまとめたエピソードを広く活用・普及させることで、地域のコミュニティや国民一人ひとりに、防災・減災への関心や意識を高めていただくことを目的としています。

ここで紹介する物語は、ほんの一部です。一日前プロジェクトから生まれた物語は、内閣府の「災害被害を軽減する国民運動のページ」<https://www.bousai.go.jp/kyoiku/keigen/ichinitimae/index.html>に掲載されています。ぜひ、アクセスしてみてください!きっと、あなたの心を動かす物語が見つかるはずです。

■一日前プロジェクトの物語・イラストは、非営利の目的であれば、広報誌やパンフレットなどで自由にお使いいただけます。「災害被害を軽減する国民運動のページ」(<https://www.bousai.go.jp/kyoiku/keigen/>)からダウンロードしてください。



発行 内閣府(防災担当)

〒100-8914 東京都千代田区永田町1-6-1(中央合同庁舎8号館)

TEL 03-5253-2111 URL <https://www.bousai.go.jp>

